

---

# 合わせ鏡 春野天使編

春野天使

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

合わせ鏡 春野天使編

### 【NZコード】

N8354A

### 【作者名】

春野天使

### 【あらすじ】

子供の頃、母親の古い鏡台で、奈々は友達の結衣と『合わせ鏡』をした。『十三番目に映る顔は死んだ時の顔』どんな顔が映るか見てみたくて、二人は十三番目の鏡を数えた。そこに映つっていた結衣の顔は……！

## (前書き)

同じ設定、同じ登場人物で短編を書こう！ という企画「グループ小説」第六弾です。「グループ小説」で検索すると他の先生方の作品も読めます。

鏡の前に座り、もう一つの鏡を合わせたら、鏡の中に無限の鏡が続いて見える。鏡に映った自分の顔も無限に続く……。まるで、遙か彼方まで鏡の道が続いているかのようだ。

「奈々ちゃん、勝手にママの部屋に入つて怒られない？」

「ママは夕方まで帰つて来ないから、大丈夫だよ」

小学四年生の一人の少女が、和室の部屋に入つて来る。そこは奈々の母親の部屋。六畳の畳の部屋で、片隅に大きな鏡台が置かれていた。

「結衣ちゃん、早くおいで」

奈々はまっすぐ鏡台を指して進み、鏡台の前に置かれた丸い椅子にちよこんと腰掛ける。

「……お邪魔します」

結衣は少し遠慮がちに、部屋に入つて来る。

「なんかこの鏡昔風だね？」

結衣は、布のかけられた鏡台をじっと見つめる。木彫りの鏡台には、小さな引き出しあついている。細かい花模様が彫られ、年月を経た木の色合いに風格がある。

「うん。ママの曾ばあちゃんの嫁入り道具だったって言つてた。ママのお祖母ちゃんも、ママもお嫁に行くとき受け継いだんだって」「へえ、じゃ、奈々ちゃんもお嫁に行く時、もつていくの？」

「え、わたしは、いらない。もっと新しくて綺麗なのがいいもん」

奈々はそう言つて、鏡を覆つっていた布をはずす。

「わたしは、この鏡好きだよ」

結衣は奈々の横に顔を並べて、鏡の中の自分と奈々を見つめる。

「ねえ、なんで鏡に布をかけていたの？」

鏡の中の奈々を見ながら、結衣は聞く。

「あのね、布をかけてないと鏡に映っちゃいいいけないものが映る」とがあるんだって」

「映っちゃいけないもの?」

結衣は田を丸くする。

「そうよ、鏡の人間がこちら側に出て来たくて、引きずり込まれるかもしれないんだって」

「えー！」

怖がる結衣を見て、奈々はクスクスと笑う。

「嘘よ。鏡がほこるからじゃないの? でもね」

奈々は鏡台の引き出しの中から、母親が使っている手鏡を取り出す。

「合わせ鏡をすると、たまに映らないはずのものが映る時があるんだって」

「合わせ鏡って何?……」

結衣は恐る恐る奈々の顔を見ながら聞いた。

「結衣ちゃん、やつてみる?」

奈々は丸椅子から立つと、代わりに結衣の手を引っ張つて椅子に座らせた。鏡の中央に緊張氣味の結衣の顔が映る。

「……どうやるの?」

「手鏡を顔の下の方にもつてこいつで」

奈々は、結衣に手鏡を渡す。

「わつ、鏡の中に鏡がいっぱい続いてる……」

結衣は無限に続く鏡を見て、驚く。じつと見ていると、鏡の中に吸い込まれてしまいそうだ。

「面白いでしょ? 結衣ちゃんの顔も鏡の中にたくさん映つてる」

「本當だ。私がいっぱい。どこまで続いてるのかな?」

結衣は面白そうに鏡の中の自分の顔を見つめる。

「手鏡の位置を変えて、ちゃんと真ん中に顔が映るようにしてみて

「……こいつ?」

結衣は手鏡の角度を変えながら、せりんと顔が中央にくるよいつする。

「うん、良いね。はつきり映つてる」

奈々は果てしなく続く鏡と結衣の顔を見つめる。

「……あのね、結衣ちゃん」

「何？」

「十三番田の鏡に映つていい顔つてね……」

奈々は結衣にピタリと近づき、食い入るように鏡を覗き込む。一  
番田、二番田、三番田……。田で鏡を数えていく。

「十三番田の鏡の顔つて？」

結衣も鏡を数える。四番田、五番田、六番田……。

「あの、言つとくけど、これも迷信みたいなもんだから」

鏡を数えてじゅうちじ、奈々も段々と鏡の中に吸い込まれてしま  
いそうな不思議な気分になつていく。七番田、八番田、九番田……。

「どんな迷信？」

結衣は怖さを隠すために、笑つて見せた。鏡の中の結衣の顔が全  
部笑顔になる。十番田、十一番田、十二番田……。

「死んだ時の顔なんだって……」

「えつ？……」

「十三番田……」

「あれつ？」

奈々は十三番田の鏡をじっと見つめる。

「おかしいな。結衣ちゃん、ちょっと鏡動かして」

「……」

結衣は黙つたまま、鏡を動かしてみる。結衣の笑顔は消えていた。  
青ざめた結衣の顔が鏡の中に続く。

「なんで？……」

奈々はもう一度、最初から数えて見る。十一番田の鏡にも、十四  
番田の鏡にも、ちゃんと結衣の顔が映つていた。それなのに……。

「なんで、十三番田だけ結衣ちゃんの顔が映つてないのよ…？」

結衣は泣きそうな顔をしている。『結衣の死んだ時の顔』その顔が映っていない。

「やだ！」

結衣は手鏡を放り投げると、椅子から立ち上がり、手鏡がガツンと落ちて、鏡にひびが入る。結衣はわっと泣き出すと、走って部屋を出ていった。

「あ、待って結衣ちゃん！」

奈々はひびの入った手鏡を拾い上げ、結衣の後を追つて部屋を出ていく。

部屋の中には、鏡台が一つ。何事もなかつたように、部屋の様子を映していた。

月日が流れ、あの日から十三年が経つた。

奈々も結衣も大人になり、『合わせ鏡』の恐い体験の記憶も薄れていった。結衣は中学生の時、両親の仕事の関係で遠くへ引っ越してしまい。今では会うことさえなくなつていた。

ただ、あの日以来、奈々は一度と『合わせ鏡』をしなくなつた。母親の鏡台は、今もある和室にあり、結衣が割つてしまつた手鏡は、今でも奈々が持つていた。しつしと捨ててしまおうと何度も思つた奈々だが、そのたびに妙に気になつて捨てることが出来なかつた。

あの鏡は、奈々の部屋の押入の奥深くに埋もれている。

奈々は企業に就職し、社会人一年生となつた。平凡なOLの仕事だが、会社にも慣れ日々充実した毎日をおくつている。

そんなある日の昼休み。いつものように、談話室でテレビを見ながらお弁当を食べていた奈々は、番組の途中で緊急のニューステロップが流れるのを、ぼんやりと眺めていた。『ピィピィピィ』と短く流れる機械音。地震情報や事件、事故等を緊急に知らせるニュースだ。

飛行機事故？

「ユーローク発成田行きの便が、操縦トラブルにより墜落したと  
いうニュースの白い文字が、事務的に流れていく。

「えー！ 成田行きだったら、日本人もたくさん乗つてたんじゃな  
い？」

「今日はこのニュースばかりになるかもね」

「あ～あ、今夜は見たい番組あつたのに」

一緒にいた他の〇・し達は、半分気にしながら半分興味本位に喋つ  
ている。

飛行機事故……。

奈々は彼女たちのお喋りに加わることなく、じっとテロップの白  
い文字を田で追つていた。

思つた通り、その日の夜は飛行機事故に関する特別のニュース番  
組ばかりになつていた。やはり、かなりの日本人乗客が乗つっていた  
らしい。

他に見る番組もなく、奈々もニュース番組を見ていた。

『では、搭乗されていたと思われる方々のお名前を、もう一度繰り  
返します』

画面に、搭乗者名簿の名前と年齢が、次々に映し出されていく。  
殺風景な青い画面に白い文字の名前。多分、あの人達はもうこの世  
にはいないのだろう……。奈々がぼんやりと考えていると、画面の  
ある名前がいきなり奈々の田の中に飛び込んでくる。

「あつ……」

「コレサワ ユイ 二十三才。他の名前と一緒に画面に映し出され  
たカタカナの名前。

「結衣ちゃん？……」

奈々は目を見開き、口に手をあててじつと名前を見つめる。テレビ  
では、敬称略のまま『コレサワ ユイ 二十三才』と淡々と読み  
上げられ、すぐに次の名前に切り替わった。まさか、ね。同姓  
同名よね。

不吉な気分を無理に追い払おうと、奈々は頭の中で思つ。もう十年以上も会つていらない昔の友達。けれど、彼女とは決して忘れることが出来ない思い出がある。

『合わけ鏡』。奈々の頭にあの日のことが蘇つた時、突然家の電話が鳴つた。奈々は思わず、ビクッと身を縮める。父親はまだ仕事から帰つてこず、母親はお風呂に入つてゐる。奈々は渋々立ち上がり、鳴り続ける電話を取つた。

「もしもし」

『あつ、奈々！ 私、亜紀。ニコース見た？』

電話の向こうから、キンキンした声が響いてくる。同級生の亜紀だ。小学生の頃、結衣とともに同じクラスだった。

「飛行機事故のこと？……」

奈々はゴクリと唾を飲み込む。聞きたくない。知りたくない現実。だが、興奮気味の亜紀は、今起こつてゐる現実を早口で喋り出す。

『結衣が飛行機事故に遭つたでしょ！ 私、ビックリしちゃつた』

「……本当に結衣なの？……」

無駄な抵抗のように、奈々は聞く。

『間違いないわよ。私、結衣がニコースークに行つてゐるの知つてたもの。それで、さつき結衣の実家にも確認したんだから』

『合わけ鏡』のことがあつて以来、奈々と結衣の関係はあまりしつくりいかなくなつていたが、結衣の転校後も、亜紀と結衣は連絡を取り合つていたらしい。

『結衣のじ両親が、すぐに現場に向かつたらしいわ』

「……そう」

奈々の声が震える。現場に向かう遺族として……。娘の遺体を確認するために。

「無事だといいわね……」

わざとらしい慰めの言葉が、奈々の口から漏れた。まだ死「は確定していないが、生きている可能性は零に近い。電話の向こうの亜紀も口「いる。しばらくした後、『また連絡するから』と言つて、

電話は一方的に切られた。

結衣、死んじゃつたんだ……。

あまりに早すぎる死。まだ、現実のことと思えず、涙さえ流れない。ただ、重苦しい空気だけが、奈々のまわりに漂っていた。

次に亜紀から電話があつたのは、それから一週間ほど経った時のことだ。飛行機事故のことは、いまだにテレビで大きく取り扱われていた。毎日のように、悲しみにくれる家族の模様が痛々しいほど映し出されている。

連絡は結衣のお葬式の日程のことだった。

「結衣もようやく日本に帰つて来られたんだね……」

『うん、遺体が見つかっただけでも幸せな方だつて、』両親は言われてた』

「そう……」

飛行機事故での無惨な遺体のことは、奈々も多少知つていた。

『でもね、その遺体つていうのがね……』

亜紀は言いにくそうに口ごもる。

「遺体がどうしたの?」

『それが、頭がなかつたらしいのよ。衝撃でどこかに飛ばされたらしいつて……』

「えつ……」

『頭から下は割と綺麗なのに、とうとう頭だけ見つからなかつたんだつて……』

「頭が……」

奈々の顔は次第に青ざめていく。頭のない遺体。遠い昔の『合わせ鏡』の出来事が鮮明に思い出される。十三番目の顔は死んだ時の顔。結衣の十二番目の鏡には、顔が映つていなかつた……！

奈々は電話を置くと、母親の部屋の鏡台まで走つて行った。鏡を覆っている布を上げる。何の変哲もない、普通の鏡。奈々の青い顔

を映しだしている。

「結衣の死んだ時の顔……」

奈々はじつと鏡を見つめる。十二番目の鏡に何も映らなかつたのは、結衣の頭がなくなつたから？

「結衣の顔はどこにあるの？」

鏡に問いかけてみても、鏡は何も答えない。だが、奈々はふとあることを思い出した。今まで実行したことはなかつたけれど、『合わせ鏡』にはまだまだ他にも色々なエピソードがある。あれをやってみたらどうだろう？

「……結衣の顔が見つかるかもしれない」

真夜中十一時前。

奈々は押入の隅に埋もれていたひび割れた手鏡を手にして、母親の鏡台の前に座っていた。静まりかえった室内。壁の時計の音だけがコチコチと時間を告げている。

「……後、一分」

顔を強ばらせ、時計の針を見つめる。子供の時以来、やつてなかつた『合わせ鏡』。奈々は『合わせ鏡』で、もう一つやってみたかったことがある。それは、十三番目の死んだ時の顔より、もっと恐いこと。恐ろしくて今まで出来なかつた遊び。だが、奈々はどうしても試してみたかった。

「……」

力チツという小さな音とともに、時計の長針と短針がピタリと重なる。奈々はそれを待つて、手鏡を顔の下に掲げた。奈々の顔が無限に続くはずだ……。

「あつ！」

だが、そこに奈々の顔は映つていなかつた。鏡の中に無限に続く顔。それは、紛れもなく結衣の顔だつた。大人になつた結衣の顔、顔、顔……。その顔が一瞬、微笑みを浮かべたような気がした。

「……結衣……」

奈々が結衣の顔に向かつて語りかけようとした時、結衣の顔はぱッと消えた。代わりに奈々の顔が鏡に映る。

「結衣、顔、見つかったね……」

真夜中ちょうどに『合わせ鏡』をすると、映るはずのないものが映る。奈々はそのことを覚えていた。奈々の瞳から涙が溢れ出る。結衣が死んだ悲しみが、今頃になつてどつと押し寄せてきた。次々に溢れる涙。奈々は拭うこともしないで、泣き続けた。

奈々は手鏡を伏せる。もし、あの時『合わせ鏡』をしなければ、結衣の死んだ時の顔を見るることはなかつた。結衣の事故は、最初から定められていた運命だったとしても、知る必要などなかつた。知つたことへの罪。ほんの遊び心からしたことが、奈々と結衣の運命まで変えてしまったようにも思えてくる。もう一度と、『合わせ鏡』はしない。奈々はそう誓つて手鏡を握りしめた。この手鏡は結衣と一緒に棺の中に入れてもらおう。結衣がなくした顔の代わりに……。

完

(後書き)

ちゅうじゅく 航機の墜落事故のことをテレビで取り上げられていて、複雑な思いで執筆しました。皆さんのが冥福をお祈りします。

『合わせ鏡』は子供の頃試してみたことがあります。自分の普通の顔が映っていましたが、無限に続く顔はなんとなく不気味でした。  
(へへへ)『鏡』というのは神秘的ですね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8354a/>

合わせ鏡 春野天使編

2010年10月8日15時54分発行